

小学校教員の「虫」と「動物」についての意識調査

平田 豊誠 小川 博士

[抄 録]

「虫」や「動物」は、一般に日常用語として使用されることが多く、人によって意味する範囲が異なっている。また、調査研究においてもこれらの用語が使用されているものの、科学的な定義による共通認識がなされておらず、調査者と被調査者間に認識のずれが生じている可能性がある。そこで、本研究では、現職小学校教員を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、「虫」や「動物」ととらえている範囲を明らかにするとともに、虫についての意識調査から女性教員と男性教員との比較検討、授業等との関連性を明らかにするための調査を行った。

その結果、「虫」のイメージは、90.2%が昆虫であるが、昆虫以外の節足動物（7.4%）や節足動物以外（2.1%）、まれに脊椎動物の一部（0.3%）が含まれることが明らかとなった。また、「動物」という用語は科学用語よりも、日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。その動物のイメージは、哺乳類が79.8%であり、続く鳥類が9.8%、爬虫類は4.8%であることが明らかとなった。また、現職の小学校教員は教育現場において、虫に触れ虫や動物に関連した取り組みを男女関係なく行っている様子が示唆された。

キーワード：虫，動物，科学用語，小学校教員

Ⅰ はじめに

「虫」や「動物」は、一般に日常用語として使用されることが多く、人によって意味する範囲が異なっている（平田・小川，2017）。従来の研究では日常用語としてイメージする「虫」や「動物」という用語として調査研究に用いられてきた現状がある（例えば、落合，1996，1997，1998；日高，2004，2005；田中，2015；木村・野崎，2016）。しかし、このような用法には、科学的な定義による共通認識がなされておらず、調査者と被調査者間に認識のずれが生じている可能性がある（例えば中村ら（2002），山下・首藤（2005），栗原・野尻（2008）

では、動物飼育の経験を問うた場合に、動物という用語を用いた調査において、小動物や昆虫も回答されている。)。そのためこれらの認識のずれの幅を明らかにするとともに、ずれが生じている実態を把握しておく必要がある。その一端となる研究が平田・小川（2017）によってなされ、幼稚園教諭・保育士志望学生にとって「虫」及び「動物」としてイメージするものについての範囲を明らかにしてきた。

一方、虫や動物、昆虫等生き物に関する意識調査では、子どもを対象とした調査や教員志望学生を対象とした調査、保護者を対象とした調査・研究がなされているが、教員を対象に行った調査報告はほとんど見受けられない。

そこで、本研究では、次の2点を研究目的とする。1点目は、現職小学校教員を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、小学校教員が「虫」や「動物」としてとらえている範囲を明らかにすることである。2点目は、虫についての意識調査から女性教員と男性教員との比較検討、授業等との関連性を明らかにすることである。

II 調査方法

1 対象及び時期

B 大学で行われた免許状更新講習の「理科」を受講した教員勤務経験者 36 名（小学校教員）を対象に調査の協力を仰ぎ、2016 年 8 月下旬日に実施した。対象者 36 名全員（女性 20 名、男性 10 名）から回答を得た。

2 調査の方法と質問項目

平田・小川（2017）の調査項目をもとに、現職教員向けに質問内容を改変して実施した。調査は質問紙法を用いて行った。今回の研究で用いた質問項目は以下の通りである。

属性質問：男女、校種、教員経験年数、理科の指導歴

- 1) 「虫」を 20 書いてください
- 2) 「動物」を 20 書いてください
- 3) 虫は好きですか、嫌いですか
1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらでもない 4 どちらかといえば嫌い 5 嫌い
- 4) 動物は好きですか、嫌いですか
1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらでもない 4 どちらかといえば嫌い 5 嫌い
- 5) あなたにとって「虫」と言われて一番の代表例は何ですか
- 6) あなたにとって「動物」と言われて一番の代表例は何ですか
- 7) 虫を今現在、触（さわ）ることについての意識について
1 平気で触ることができる 2 何とか触ることができる 3 どちらでもない
4 極力触りたくない 5 絶対に触わりたくない

質問1) および2) では、「20書いてください」と教示するのみであり、出題者は補足の説明をせず、記述する内容の判断を回答者に任せることとした。

質問3) および4) では、「虫」及び「動物」に対する好き、嫌いについて、「1好き」「2どちらかといえば好き」「3どちらでもない」「4どちらかといえば嫌い」「5嫌い」の5件法での回答を求めた。

質問5) および6) では、虫や動物の代表例といわれたときに思い浮かべる一番目のものに限定し、その名称を回答してもらった。

質問7) では、虫を触ることの意識について、現在の状況を「1平気で触ることができる」「2何とか触ることができる」「3どちらでもない」「4極力触りたくない」「5絶対に触わりたくない」の5件法で回答を求めた。

III 結果

1 「虫」について

虫についての調査結果について述べていく。「1」「虫」を20書いてください」について記述された「虫」の名称と記述した人数を表1に示す。集計方法として、例えば、カブトムシ32の場合、36名中32名が記述していたことを表している。同様に虫の名称ごとの人数は、その虫を記述していた人数を表している。集計に当たっては、類似した記述は一般的に代表されている1つの名称にまとめてカウントすることとした。まとめた例としては以下のようなものがある。①ひらがな、カタカナ、漢字の表記は、すべてカタカナ表記で統一した。②クワガタとクワガタムシの場合、クワガタとしてまとめた。③トンボ、アカトンボ、シオカラトンボ、オニヤンマのような場合（包含関係のある名称を述べていた場合、詳細名を含むそれらを代表する名称として）、トンボとしてまとめた。④同じ人物が、モンシロチョウ、アゲハチョウ、アサギマダラと記述していた場合は、3カウントとせず、チョウとしてまとめ1カウントとした。⑤チョウやトンボ、クモなどは「目」でまとめた。一般名称として認知度が高いセミなどは「科」でまとめることとした。⑥生物の名称として明らかに誤りのあるものは、正しい名称として集計を行った。

今回の集計にあたり、記載された虫を一般的分類と考えられる以下の5つのカテゴリに分類整理した。1. 昆虫, 2. 幼虫等, 3. 節足動物 (昆虫除く), 4. 節足動物以外・幼虫以外, 5. セキツイ動物。昆虫カテゴリに出現した虫の名称の数は45種類、幼虫等は7種類、節足動物 (昆虫除く) は10種類、節足動物以外・幼虫以外は5種類、セキツイ動物は2種類だった。記述された名称の総数は625個だった。それぞれのカテゴリごとでは、昆虫カテゴリ547個 (87.5%), 幼虫等は17個 (2.7%), 節足動物 (昆虫除く) は46個 (7.4%), 節足動物以外・幼虫以外は13個 (2.1%), セキツイ動物は2個 (0.3%) であった。

次に「5）あなたにとって「虫」と言われて一番の代表例は何ですか」について記述された「虫」の名称と記述した人数を表2に示す。調査対象者36人から代表例として1つの名称が記述され、総数は36個だった。昆虫として12種類の名称が記述され35個（97.2%）、節足動物（昆虫除く）が1種類1個（2.8%）だった。1番多く記述されたのは「カブトムシ」であり、13個（36.1%）だった。

表1 「虫」の名称として記述されたものの出現数

カテゴリ	虫の名称	記述人数	カテゴリ	虫の名称	記述人数	
昆虫 547	チョウ	36	幼虫等 17	ケムシ	7	
	カブトムシ	32		アオムシ	3	
	クワガタ	32		イモムシ	2	
	バッタ	31		シャクトリムシ	2	
	アリ	27		ウジムシ	1	
	セミ	27		カイコ	1	
	カマキリ	26		ミノムシ	1	
	カ	25		ダンゴムシ	17	
	トンボ	25		クモ	9	
	ゴキブリ	23		ムカデ	8	
	テントウムシ	22		節足動物 (昆虫除く) 46	ダニ	4
	ガ	20		ゲジゲジ	3	
	コオロギ	20		ザリガニ	1	
	ハチ	20		フナムシ	1	
	スズムシ	17		サソリ	1	
	カミキリムシ	16		ヤスデ	1	
	カナブン	15		ワラジムシ	1	
	キリギリス	14	ミミズ	6		
	ハエ	14	節足動物以外 ・幼虫以外 13	カタツムリ	3	
	アブ	13	ナメクジ	2		
	アメンボ	10	ゾウリムシ	1		
	カメムシ	9	ミドリムシ	1		
	ナナフシ	9	セキツイ動物 2	イモリ	1	
	アブラムシ	8	ヤモリ	1		
	コガネムシ	6				
	タマムシ	6				
	タガメ	5				
	マツムシ	5				
	ブヨ	4				
	イナゴ	3				
	クツワムシ	3				
	ゲンゴロウ	3				
	ノミ	3				
	ホタル	3				
	タイコウチ	3				
	ウスバカゲロウ	2				
	フンコロガシ	2				
	ガガンボ	1				
	ケラ	1				
	コオイムシ	1				
	ゴミムシ	1				
	シミ	1				
	ハンミョウ	1				
	マイマイカブリ	1				
	ミズスマシ	1				

表2 「虫」の代表例 (n=36)

カテゴリ	記述語	出現数
昆虫 35	カブトムシ	13
	バッタ	5
	チョウ	4
	カ	3
	ゴキブリ	2
	セミ	2
	アリ	1
	カマキリ	1
	クワガタ	1
	テントウムシ	1
	トンボ	1
	ホタル	1
	節足動物	ダンゴムシ

表3 「動物」の名称として記述されたものの出現数

カテゴリ	動物の名称	記述人数	カテゴリ	動物の名称	記述人数	
1.哺乳類 658	イヌ	34	哺乳類 (つづき)	以下記述人数1のもの	21	
	ネコ	34		アナグマ, オリックス, カワウソ, コウ		
	ライオン	32		モリ, ジュゴン, セイウチ, テナガザ		
	キリン	31		ル, トド, トナカイ, ナマケモノ, ヌートリ		
	ゾウ	30		ア, バイソン, バク, ビーバー, ヒグ		
	トラ	26		マ, ベンガル, ポニー, モグラ, モル		
	ウマ	24		モット, ヤマネコ, ラマ		
	サル	24		カラス	8	
	ウシ	22		トリ	7	
	クマ	21		ニワトリ	6	
	ゴリラ	18		ペンギン	6	
	ウサギ	17		ダチョウ	5	
	カバ	17		ワシ	5	
	シカ	17		スズメ	4	
	ネズミ	16		フクロウ	4	
	シマウマ	15		2.鳥類		
	パンダ	14		81	アヒル	3
	イノシシ	12		カモメ	3	
	イルカ	12		クジャク	3	
	チーター	12		タカ	3	
	ヒツジ	12		ツバメ	3	
	サイ	11		フラミンゴ	3	
	キツネ	10	ハクチョウ	2		
	クジラ	10	キジ	2		
	ブタ	10	以下記述人数1のもの	14		
	カンガルー	9	インコ, エナガ, オウム, ガチョウ, カフ			
	コアラ	9	セミ, キツツキ, シマエナガ, トキ, ト			
	タヌキ	9	ビ, ハト, ハヤブサ, ヒヨコ, ペリカン,			
	チンパンジー	9	ホトトギス			
	ヒョウ	9	ヘビ	12		
	ヤギ	9	ワニ	8		
	オオカミ	8	3.爬虫類			
	ハムスター	8	40	カメ	7	
	ラッコ	8	トカゲ	5		
	カピバラ	7	カメレオン	2		
	ラクダ	7	以下記述人数1のもの	6		
	リス	7	エリマキトカゲ, ニシキヘビ, マムシ,			
	オランウータン	5	ヤマカガシ, ヤモリ, リクガメ			
	ヒト	5	4.両生類			
	レッサーパンダ	5	8	カエル	6	
	アザラシ	4	イモリ	2		
	アシカ	4	5.魚類			
ジャガー	4	19	サカナ	3		
イタチ	3	サメ	3			
カモシカ	3	メダカ	2			
シロクマ	3	以下記述人数1のもの	11			
ハイエナ	3	アジ, エイ, カワハギ, サバ, サワラ,				
アライグマ	2	サンキ, ジンベエザメ, タイ, タチウオ,				
アルパカ	2	フナ, マグロ				
オットセイ	2	6.昆虫				
ヌー	2	9	セミ	2		
ハリネズミ	2	アリ	2			
ピューマ	2	以下記述人数1のもの	5			
マントヒヒ	2	カブトムシ, カマキリ, キリギリス, コン				
ヤブイヌ	2	チュウ, ハチ				
ロバ	2	7.その他				
		10	カニ	2		
			ミジンコ	2		
			以下記述人数1のもの	6		
			エビ, ダンゴムシ, フナムシ, カタツム			
			リ, クモ, ヒドラ, プラナリア, ミミズ, ム			
			カデ			

2 「動物」について

次に動物についての調査結果について述べていく。「2）「動物」を20書いてください」について記述された「動物」の名称と記述した人数を表3に示す。この「動物」の集計方法として、「虫」と同様に、イヌ34の場合、36名中34名が記述していたことを表している。「虫」の場合と異なることは、動物の名称ごとの人数は、それらを代表する名称にまとめてカウントするというを行わず、各動物名称を記述していた人数をそのまま集計した。すなわち、類似した記述の場合や包含関係のある名称を述べていた場合も別々のものとしてカウントした。例えば哺乳類では、ネコ34とあるが、これは「ネコ」と記述したものだけをカウントしており、「ベンガル」や「ヤマネコ」の記述があっても別々のものとしてカウントした。鳥類でも同様に、「エナガ」と「シマエナガ」を別々にカウントした。爬虫類では「ヘビ」と「ニシキヘビ」、「マムシ」、「ヤマカガシ」を別々に、「トカゲ」は「エリマキトカゲ」を別々に、「カメ」は「リクガメ」を別々にそれぞれカウントした。

今回の集計にあたり、記載された動物を以下の7つのカテゴリに分類整理した。1. 哺乳類, 2. 鳥類, 3. 爬虫類, 4. 両生類, 5. 魚類, 6. 昆虫, 7. その他。哺乳類カテゴリに出現した動物の名称の数は77種類だった。同様に鳥類は30種類, 爬虫類は11種類, 両生類は2種類, 魚類は14種類, 昆虫は7種類, その他8種類だった。

記述された名称の総数は825個だった。それぞれのカテゴリごとでは、哺乳類カテゴリ658個(79.8%), 鳥類は81個(9.8%), 爬虫類は40個(4.8%), 両生類は8個(1.0%), 魚類は19個(2.3%), 昆虫は9個(1.1%), その他10個(1.2%)だった。

次に「6）あなたにとって「動物」と言われて一番の代表例は何ですか」について記述された「動物」の名称と記述した人数を表4に示す。調査対象者36人から代表例として1つの名称が記述され、総数は36個だった。哺乳類として11種類の名称が記述され35個(97.2%), 両生類が1種類1個(2.8%)だった。1番多く記述されたのは「イヌ」であり、17個(47.2%)だった。

表4 「動物」の代表例 (n=36)

カテゴリ	記述語	出現数
哺乳類 35	イヌ	17
	ゾウ	4
	ライオン	4
	ネコ	3
	ウシ	1
	ウマ	1
	キリン	1
	クマ	1
	トラ	1
	パンダ	1
	ヒト	1
両生類	カエル	1

3 「虫」「動物」についての好き嫌いについて

「3）虫は好きですか、嫌いですか」および「4）動物は好きですか、嫌いですか」についての結果を表5および図1に示す。好きと回答した数値を1, 嫌いと回答した数値を5としている。したがって、数値の大きいほうが嫌いということになっている。虫の好き嫌いの平均値は2.89であり、標準偏差は1.22だった。動物の好き嫌いの平均値は1.97であり、標準偏差は0.96だった。虫の好き嫌いとは動物の好き嫌いは、虫では「嫌い」、「どちらかといえば嫌い」

と回答した数も 13 人 (36.1%) だったが、動物では 2 人 (5.6%) との違いが見受けられた。

表 5 虫と動物の好き嫌いの割合集計 (n=36)

	虫好嫌	動物好嫌
1 好き	4	13
2 どちらかといえば好き	13	14
3 どちらでもない	6	7
4 どちらかといえば嫌い	9	1
5 嫌い	4	1
平均	2.89	1.97
標準偏差	1.22	0.96

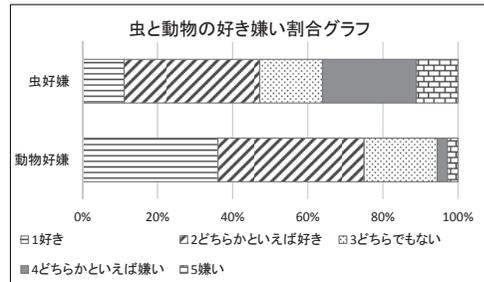


図 1 虫と動物の好き嫌いの割合グラフ (n=36)

4 現在, 虫を触ることについて

「7) 虫を今現在, 触 (さわ) ることについての意識について」の結果を図 2 に示す。1. 平気で触ることができる, 2. 何とか触ることができると回答したのは 23 名 (63.9%) だった。4. 極力触りたくない, 5. 絶対に触わりたくないと回答したのは 10 名 (27.8%) だった。

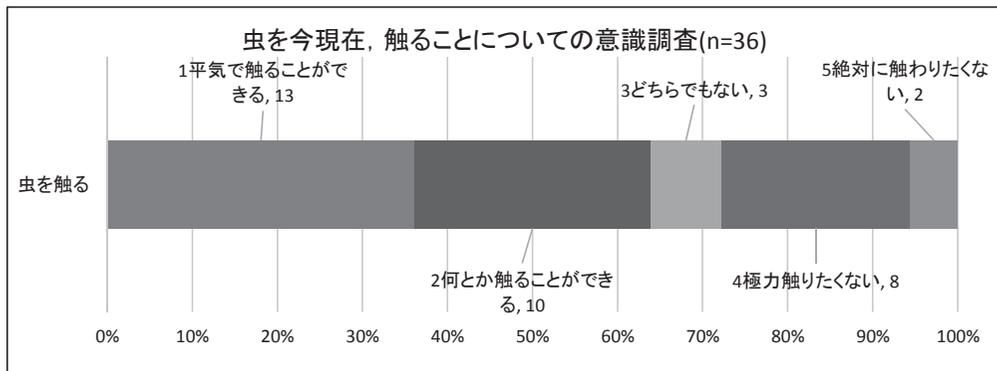


図 2 虫を今現在, 触 (さわ) ることについての意識調査 (n=36)

IV 考察

1 「虫」としてイメージする範囲について

虫についてのイメージは表 1 および表 2 より, 昆虫を主とした日ごろ身の回りに存在し, 目にしていない小動物がそのほとんどを占めているが, ゾウリムシやミドリムシからイモリやヤモリまでと広範囲に及ぶことが明らかとなった。また, 虫の代表例として記述されたものも昆虫を主とする小動物であり, 代表例として挙げられた 36 例中 35 例が昆虫であった。1 例だけダンゴムシの記述があり, 小動物の捉えている範囲の違いが明らかとなった。

一番多くの記述がなされたのがチョウ (36 人), 2 番目以降はカブトムシ (32 人), クワガ

タ（32人）、バッタ（31人）、アリ（27人）であった。これらは、日ごろ目にしたり、話題に上がったりする小動物であり昆虫である。昆虫以外では15番目にダンゴムシ（17人）、23番目にクモ（9人）、26番目にムカデ（8人）、28番目にケムシ（7人）、29番目にミミズ（6人）と続く。ケムシやアオムシ等、今回幼虫等のカテゴリに分類したものは昆虫の幼虫である。しかし、回答者にとっては1つの虫として認識されていると考えられる。単細胞生物としてゾウリムシとミドリムシがそれぞれ1人に記述されている。脊椎動物では、イモリ（1人）、ヤモリ（1人）が記述されており、脊椎動物でも比較的小さい爬虫類や両生類を虫として認識している場合もあることが判明した。

小学校では、3年生の単元に、「(1) 昆虫と植物」があり、昆虫について学習する場面がある。また小学校学習指導要領解説理科編（文部科学省、2008：12）では「○自然を愛する心情を育てること」に「植物の栽培や昆虫の飼育という体験活動を通して、その成長を喜んだり、昆虫の活動の不思議さやおもしろさを感じたりする。」との解説もある。これらのことから、小学校教員では「虫」としてイメージするものは、その範囲のほとんどが昆虫となっている傾向がある。また、昆虫以外で虫としてイメージされるダンゴムシも、3年生の単元「(2) 身近な自然の観察」において取り上げられている小動物である。今回の小学校教員を対象とした調査結果では、平田・小川（2017）の調査において幼稚園教諭・保育士志望学生で出現していた幼虫等のカテゴリにおける「ヨウチュウ」とした回答はなく、すべて昆虫の幼虫の具体的な名称が記述されていた。これらのことから、小学校教員では「虫」という小動物のイメージとなると、昆虫（幼虫含む、90.2%）がそのほとんどを占めることとなる。また、小学校学習指導要領解説理科編（文部科学省、2008：35）で取り上げられているダンゴムシも含めると93.0%となる。

以上より「虫」という用語は日常用語として用いられており、人によってその範囲には多少の違いがあることが明らかとなった。小学校教員の場合、その範囲のほとんどが昆虫やダンゴムシであり指導内容に含まれるものであるが、ゾウリムシやイモリといったものまで含む場合もあることが明らかとなった。

2 「動物」としてイメージする範囲について

動物についてのイメージは表3および表4より、哺乳類を主とした日ごろ身の回りに存在し、ペットや動物園、映像等で目にしているものがそのほとんどを占めている。カラスをはじめとする鳥類、ヘビなどの爬虫類、カエルやサメといった両生類や魚類も記述されている。加えて無脊椎動物の記述も2.3%あるが、動物の範囲としてとらえられているのは、脊椎動物がそのほとんど（97.7%）であることが明らかとなった。

鳥類の中に、トリと記述したのが7名おり、トリを動物名称と認識していることが明らかとなった。なお、トリと記述した7名中5名が他の鳥類（ペンギン（4人）、カラス（2人）、

アヒル (1人), カモメ (1人), ニワトリ (1人), ヒヨコ (1人)) を記載していた。同じく魚類についても, サカナと記述したのが3名おり, 3名ともにトリを記述していた。このことから分類の包含関係を示す名称を動物の一般名称と混同して認識している実態が2割程度 (トリが36人中7名であり, サカナ3名はその7名に含まれることから実割合は19.4%) あることが明らかとなった。また, 1人ではあるが, 「虫」の調査では記述の無かったコンチュウの記述が「動物」の調査では記述されており, これもトリ・サカナと記述していた人物と同一であった。

イヌ (34人), ネコ (34人) が一番多く記述されておりペット等, 日常よく目にしてしている動物であると考えられる。ただし, 動物の代表例となるとイヌ (17人) であり, ネコは (3人) でゾウ (4人), ライオン (4人) につぐ4番目となる。ペット以外で記述された動物名は主に動物園にいるものである。

以上より「動物」という用語は科学用語としての動物という認識よりも, 日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。これは平田・小川 (2017) の調査と同様の傾向を示している。これらから, 初等教育を担っている教員が動物=哺乳類という認識を持っていることが示唆され, 偏った動物概念や認識を無意識に児童たちに植え付けている要因となっている可能性を指摘することができる。

3 「虫」・「動物」の意識について

虫の好き嫌いとは動物の好き嫌いについては (表6), どちらも好きな傾向を回答した人数が16人 (44.4%) であり, どちらも嫌いな傾向を回答した人数は2人と少ない。表6より, 動物は好きな傾向にある (27人) が, そのうち虫は嫌いな傾向のものが5人 (17.9%) である。逆の, 虫は好き傾向だが, 動物は嫌い傾向の者は存在しない。動物好きが安定的に多く, 虫の好き嫌いが分かれている現状がうかがえる。

虫の好き嫌いとは虫を触ることの意識について (表7) から, 虫を触りたくない傾向のほとんど (10人中9人) が虫嫌い傾向である。

表8の虫の好き嫌いとは男女とのクロス集計で, 「1.好き」, 「2.どちらかといえば好き」を答えた好意的回答は女性が6人, 男性が10人だった。また, 「4.どちらかといえば嫌い」 「5.嫌

表6 虫の好き嫌いとは動物の好き嫌いのクロス集計 (n=36)

		動物好き嫌い				
		1.好き	2.どちらかといえ ば好き	3.どちらでもない	4.どちらかといえ ば嫌い	5.嫌い
虫 好 き 嫌 い	1.好き	3	1	0	0	0
	2.どちらかといえ ば好き	7	5	1	0	0
	3.どちらでもない	2	4	0	0	0
	4.どちらかといえ ば嫌い	1	3	5	0	0
	5.嫌い	0	1	1	1	1

表7 虫の好き嫌いとお虫を触ることの意識とのクロス集計（n=36）

		虫を今現在、触(さわ)ることについての意識				
		1.平気で触ることが できる	2.何とか触ること ができる	3.どちらでもな い	4.極力触りたく ない	5.絶対に触わ りたくない
虫 好 き 嫌 い	1.好き	2	2	0	0	0
	2.どちらかといえば好き	9	4	0	0	0
	3.どちらでもない	2	0	3	1	0
	4.どちらかといえば嫌い	0	3	0	6	0
	5.嫌い	0	1	0	1	2

い」を答えた嫌悪的回答は女性が11人、男性が2人だった。これらの比較を2×2のFisher正確確率検定で行った結果有意な差が見られた（両側検定：p=0.0216*（p<.05））。

表9の虫を触ることと男女とのクロス集計で、「1.平気で触ることができる」「2.何とか触ることができる」を答えた、触ることが可能な回答は女性が10人、男性が12人だった。また、「4.極力触りたくない」「5.絶対に触わりたくない」を答えた、触ることを避けたい回答は女性が8人、男性が2人だった。これらの比較を2×2のFisher正確確率検定で行った結果有意な差は見られなかった（両側検定：p=0.1241, n.s.）。

表8 虫の好き嫌いとお虫を触ることのクロス集計（n=35）（性別無回答者1名除外）

		女	男
虫 好 き 嫌 い	1.好き	2	2
	2.どちらかといえば好き	4	8
	3.どちらでもない	3	3
	4.どちらかといえば嫌い	7	2
	5.嫌い	4	0
合計		20	15

表9 虫を触ることと男女とのクロス集計（n=35）（性別無回答者1名除外）

		女	男
虫 を 触 る こ と	1.平気で触ることができる	5	8
	2.何とか触ることができる	5	4
	3.どちらでもない	2	1
	4.極力触りたくない	6	2
	5.絶対に触わりたくない	2	0
合計		20	15

以上より、現職の小学校教員において、動物については好きな傾向を示すものが多く、虫についても好きな傾向を示すものが多かった。男女の比較では虫の好き傾向と、嫌い傾向に有意な差が見られたが、虫を触ることでは有意な差が見られなかった。このことから、好き嫌いはあるが、授業等で必要に応じて虫に触れていくことが可能となっていることが示唆された。

V まとめと今後の課題

本研究では、以下の2点を目的としてきた。1点目は、現職小学校教員を対象に、「虫」及び「動物」としてイメージするものについての調査を行い、小学校教員が「虫」や「動物」としてとらえている範囲を明らかにすることである。2点目は、虫についての意識調査から女性教員と男性教員との比較検討、授業等との関連性を明らかにすることである。

今回の調査研究により、「虫」という用語は日常用語として用いられており、虫のイメージは、90.2%が昆虫であるが、昆虫以外の節足動物(7.4%)や節足動物以外(2.1%)、まれに脊椎動物の一部(0.3%)が含まれることが明らかとなった。また、「動物」という用語は科学用語としての動物という認識よりも、日常用語として用いられている動物という認識が強固であることが明らかとなった。その動物のイメージは、哺乳類が79.8%とほとんどであり、続く鳥類が9.8%爬虫類は4.8%であることが明らかとなった。

また、現職の小学校教員は、虫嫌いの学生が多くいるとの報告の中(平田・小川2017)、教員として採用後は教育現場において、虫に触れ虫や動物に関連した取り組みを男女関係なく行っている様子が示唆された。

今回は、現職の小学校教員を対象としていた。今後は、初等中等教育の教員志望学生や現職幼稚園教員・保育士が「虫」や「動物」についてどのような意識を持っているのかを明らかにしていくためにも調査の対象を広げていく必要がある。調査の具体的対象としては小学校教員志望学生や中学校・高等学校理科教員志望学生である。さらに、学生のみならず、現職の教員すなわち幼稚園教員、保育士を調査対象としていく。また、幼稚園や保育所での虫や動物に関連した取り組みの実態と幼稚園教員、保育士の「虫」や「動物」に関する意識との関連をより詳しく調査していくことも今後の研究課題としたい。

VI 附記

本研究は島田明美：2016年度卒業論文「動物や虫に対する意識調査をもとにした一考察—小学校教員を対象に行ったアンケートより—」のデータをもとに大幅に加筆修正、再構成したものである。本研究はJSPS科研費15K04462の一部を用いて実施された。

引用文献

- 日高俊一郎「虫嫌いの子どもの親は虫嫌いか?—虫嫌いに関する親子の関連性—」日本科学教育学会研究会研究報告19(2),57-62,2004
- 日高俊一郎「虫嫌いの子どもの親は虫嫌いか?—子どもの虫嫌いに与える親の影響—」日本理科教育学会九州支部研究紀要(33),M1-M7,2005
- 平田豊誠,小川博士「幼稚園教諭・保育士志望学生の「虫」と「動物」についての意識調査」佛教大学教育学部学会紀要, No.16, pp.63-74, 2017
- 木村紗帆,野崎健太郎「保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識—虫嫌いの仕組み—」椋山女学園大学教育学部紀要9,109-119,2016
- 栗原泰子,野尻裕子「保育者養成学生の動物との関わりについて—動物への対応と幼児への援助について—」川村学園女子大学研究紀要19(2),27-38,2008
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説理科編」2008
- 中村陽一,渡邊ユカリ,遠藤翠「幼稚園における飼育の実態に関する研究」日本保育学会大会発表論文

小学校教員の「虫」と「動物」についての意識調査（平田豊誠・小川博士）

- 集 (55), 440-441, 2002
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子－その実態と原因の考察（1）－」日本保育学会大会研究論文集（49）, 64-65, 1996
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子－その実態と原因の考察（2）－」日本保育学会大会研究論文集（50）, 692-693, 1997
- 落合進「むしの好きな子嫌いな子－その実態と原因の考察（3）－」日本保育学会大会研究論文集（51）, 302-303, 1998
- 田中悠樹「教員志望学生の虫に対する嫌悪感情について－虫嫌いの自然体験活動に対する意識への影響－」日本理科教育学会全国大会要項（65）, 163, 2015
- 山下久美, 首藤敏元「幼稚園・保育園の動物飼育状況と飼育体験効果に関する研究展望－子どものムシとの関わりに関する研究に注目して－」埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要（4）, 177-188, 2005

（ひらた とよせい 教育学科）

（おがわ ひろし 京都ノートルダム女子大学）

2017年10月31日受理